

サポートツール全国キャラバン2013「教材教具研修会」in 静岡

発達障害がある子ども一人ひとりのニーズに応じた  
指導・支援の具体的方法

**研修会報告書**

2014年2月16日

静岡県コンベンションアーツセンター/グランシップ

主催：特定非営利活動法人 全国LD親の会

共催：静岡県LD等発達障がい児・者親の会「きんもくせい」

## 【研修会開催趣旨】

「障害者の権利に関する条約」への批准に向けた国の取組みの中で、平成23年7月、障害者基本法改正案が可決され、平成24年7月には「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」の中で「障害のある子どもと無い子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきである」という提言がなされた。「共生社会」とは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会であり、その形成に向けたインクルーシブ教育システム構築が求められている。

2007年4月、学校教育法が改正され、特別支援教育の推進が図られてきた。全国LD親の会では、2006年度から2年間にわたり、文部科学省から「障害のある子どもへの対応におけるNPO等を活用した実践研究事業」の委嘱をうけ、「LD、ADHD、高機能自閉症等の発達障害向けの教材・教具の実証研究」を日本発達障害ネットワーク（JDDネット）の加盟団体等と共同で行い、学校や療育機関での先行事例・有効事例、家庭での工夫等による教材・教具のアイデア、事例を収集して、LD、ADHD、高機能自閉症等の発達障害のある子どもの困難やニーズに合わせた有効なサポートツール（教材・教具など）を体系的に整理し、発達障害児のためのサポートツール・データベース（教材・教具DB）

<http://www.jpald.net/research/index.html>

を作成した。

さらに、2009年度からは、日本財団の助成を受けて、発達障害児のためのサポートツール・データベース（教材・教具DB）を質、量とも充実させ、普及させるための事業に取り組み、昨年度からは、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築を目指して、特別支援教育の推進によって蓄積されてきたノウハウの汎用化・ユニバーサルデザイン化・様々な障害の状態に応じた支援機器の充実を図った「発達障害児のためのサポートツールの個別の使い方とユニバーサルデザイン化」事業に取り組んでいる。

ユニバーサルデザイン化には、一人一人のニーズを把握するパーソナル化の視点が不可欠であり、各地で研修会を開催して「インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の視点」について考えていく。開催準備や開催後の連携を視野に入れて、全国LD親の会加盟の開催地域の親の会を中心に、特別支援教育士資格認定協会S.E.N.Sの会各支部会・各都道府県作業療法士会と連携を図って進めていく予定であり、今年度は長野市と静岡市で開催する。

## 【研修会開催要項】

日 時：2014年2月16日（日）10：00～16：40

会 場：静岡県コンベンションアーツセンター/グランシップ 会議室910  
静岡県駿河区池田79-4

### プログラム

- 1、講演1 「発達障害のある子どもの特性に沿ったサポートと教材の活用」  
～使い方で変わる教材の有効性～

講師 山田 充 氏

(特別支援教育士スーパーバイザー・自閉症スペクトラム支援士アドバンス・  
堺市立日置荘小学校通級指導教室教諭・堺市特別支援教育専門家チーム・  
堺市特別支援教育推進リーダー育成研修推進委員)

- 2、講演2 「発達障害のある子どもの感覚運動機能に応じた教材教具の工夫」

講師 嶋谷 和之 氏

(日本感覚統合学会インストラクター・大阪市更生療育センター作業療法士・  
大阪府作業療法士会 発達部門副代表)

- 3、ワークショップ

「子どものテスト等や、ビデオによる事例検討の手法ワーク」

主 催： 特定非営利活動法人全国LD親の会

共 催： 静岡県LD等発達障がい児・者親の会「きんもくせい」

後 援： 静岡県教育委員会、静岡市教育委員会、浜松市教育委員会、静岡市発達障  
害者支援センター「きらり」、社会福祉法人浜松市社会福祉事業団(浜松市  
発達相談支援センター「ルピロ」)、一般社団法人日本LD学会、特別支  
援教育士資格認定協会 S.E.N.S の会 静岡支部会、一般社団法人日本作業  
療法士協会、一般社団法人静岡県作業療法士会、日本感覚統合学会

事務局： 〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-26-5 バロール代々木415

TEL/FAX： 03-6276-8985 E-MAIL： jimukyoku@jpald.net

URL： <http://www.jpald.net/>

## 「発達障害のある子どもの特性に沿ったサポートと教材の活用 ～使い方で変わる教材の有効性～」

報告者：山田 充（特別支援教育士スーパーバイザー）

講演は、まず原因を考えない支援は、子どもにやってもやっても出来ない経験をさせている、その結果子どものモチベーションを下げているという説明から始まった。さらに具体的な子どもの姿とその子どものもつトラブルを紹介しながら、その要因が思いもよらない原因で起こっていることを説明していった。そのことに対応しないと二次障害となる。学校現場などで問題行動を起こす子どもたちの多くは、学習困難への支援がしてもらえず、そこから問題行動に発展する二次障害であることが多い。二次障害というものがあるということを強調しながら話を進めた。

学習困難の要因を探る体験のために、子どもの算数のテスト問題などを提示し、誤りの要因をきちんと考えていき、本人の特性と結びつけることで、学習支援の具体的で効果的な方法を見つけることが出来ることを紹介した。分析の方法についても、事例をだしながら紹介した。

このように子どもの様子を紹介する事例ベースで、講演をすすめ、その事例の子どもへの対応を紹介する中で、実際に使用している教材（データベースで紹介されている物も含めて）のコンセプトを紹介するとともに具体的な使用方法について説明していった。

次に消化する発達障害への支援方法を障害特性ごとにまとめて説明した。LD状態への対応は認知への支援、ADHD傾向への支援は集中や注意のコントロールへの支援、自閉症スペクトラム障害傾向の子どもたちには、その特性の理解と特性に沿った道筋の支援が必要であることを紹介した。

1時間半を越える講演であったが、会場いっぱいの参加者はとても熱心に聞いて下さり、たくさんの有り難い感想を頂いた。感想の中で特徴的なことは、このような要因に即した具体的な支援の話始めて聞いたという方が多かったこと、子どもの様子を思い浮かべながら聞いていただく方が多数おられたことと、子どもの様子や行動を分析することの重要さを認識した、教材もたくさん知ることが出来た、また今後実践してみたいというような積極的な感想を多数いただいた。

### 感想から

- ・ いつも腕組みをして子どもの宿題をチェックしていた。机のまわりには漫画があり気が散っていた。帰ったらすぐに周りの環境を変えてサポート方法を変えていく。
- ・ どんなよい教材でも、本人の困っていることに合わないと本人のやる気を失わせていくことがあるとわかった。
- ・ 子どもがいうことをきくこと、全くきかないことがあり不思議でしかたなかったが、納得させられるということが腑に落ちた。
- ・ 山田先生が近くにいってほしいと思った。うちの子をみていただきたい。
- ・ 「なぜか」と原因を解析することが大切と改めて思った。「全部できなくても・・・」も頭のすみに残して生活したい。(以上保護者)
- ・ 困難さの背景のさぐりかたの例も参考になった。

- ・子どもたちにうまくいかない説明をして、それからうまくいく方法を教えてそれを徹底的に行うことがわかった。その因果関係を科学的にとらえる力をつけたいと思った。
- ・聴きながら、クラスの子どもたちの顔が何人も浮かんだ。
- ・普通の指導の過ちを教えていただいた。子どもの実態を考えるのですが、その原因にまで行きつかぬまま指導しているのが現状である。原因をさぐるスキルがない。子どもたちに申し訳ない。
- ・新しい方法を知ったときすぐに飛びついてしまう自分にとってあれこれ試すことは子どものためにならないということが重く残った。
- ・なぜつまづいているのか、的確に課題分析できる力が不足していることを痛感した。
- ・私立底辺校とよばれる高校に勤務。発達障害の生徒は30人クラスに5-6人はいる状態に戸惑う。今日の話参考に新学期に向かおうと思う。(以上教員)
- ・支援のためには1人ひとりの状態を把握し、その子にあった支援をしていくこと。
- ・お子さん自身が自分の特性や支援のしかたに納得することの重要性を再認識した。
- ・アセスメントを担う人材として貢献できるよう努力していきたい。(以上作業療法士)
- ・実践されているかたの経験に裏付けられていて、興味深い内容だった。(SC)
- ・山田先生が子どものアセスメントを適切にされる高い能力を持ち、そのうえで多数の手立て教材を選んでいらっしゃる事が印象的。通常学級にいる子どもに対してどれだけ個々の視点をもてるか、現実には厳しいように思う。(言語聴覚士)
- ・小学4年9歳の壁というお話に納得した。小4から学校に行っていないで現在どこにも所属していないかたの支援をしている(社会福祉士)
- ・日常に置き換えすぐに実行できる話でよかった。(特別支援教育支援員)
- ・アセスメントの重要性をふりかえることができた。子どもの支援だけでなく、教師や相談員のアセスメント力をあげる研修や事例をもっとやっていかななくてはと感じた。(相談支援事業所コーディネーター)



展示教材

## 講演2 報告

# 「発達障害のある子どもの感覚運動機能に応じた教材教具の工夫」

報告者：嶋谷 和之

(日本感覚統合学会テストメカニクスインストラクター・  
大阪府作業療法士会 発達部門副代表)

## ねらい

普段私たちは、何気なく姿勢を保ち、運動を行い、手を使って物や道具を扱っているが、これらはほとんど意識されることなく自動的に行っていることが多い。そのため、感覚運動機能を背景的な要因とする子どもの困難に気づきにくい、分析しにくいという場合も少なくない。そこで、講演のねらいは以下の4点とした。

- ・普段何気なく行っている活動を意識化し子どもの困難と重ね合わせることで、子どもを理解し手立てにつなげるきっかけとする。
- ・方法論よりも、理解と支援につながる視点や発想を伝える。
- ・すぐにできる物や道具の工夫で、子どもの活動がより行いやすくなることを知っていただく。
- ・後で行う事例分析のワークにつながるように、感覚運動機能の観点からの子どもの見方を紹介する。

## 内容

- ①作業療法士の視点について説明を行った。
- ②感覚運動機能について、以下の2点についてより具体的に説明した。
  - ・安定した姿勢が保証されて、効率よく手を使い物や道具を操作できることを説明した。
  - ・感覚情報は食物と同じように、人間が生きていく上で必要な栄養素であると捉えることも可能である。子どもに必要な感覚情報を、日常生活の中に溶け込むように提供していくという視点を説明した。
- ③大阪府作業療法士会パンフレット「発達障がいのある児童・生徒への学習および学校生活援助」から、「よくある相談」のいくつかを紹介し、困難の要因と手立ての例を説明した。  
紹介した「よくある相談」は、以下のとおりである。
  - ・姿勢の保持が難しい
  - ・筆圧が強すぎる、弱すぎる
  - ・食べこぼしが多い（箸がうまく使えない）
  - ・はさみ、定規、コンパスがうまく使えない
  - ・なわとびができない
- ④事例を通して子どもの困難、背景的な要因、手立てを具体的に説明した。
  - ・姿勢の保持に困難のある事例。低緊張に加えて、自分の身体の状態を把握しづらいことが背景的な要因。滑り止めシートを座面に敷くと臀部の前ずれは改善するも、左右への崩れに対しては改善が認めにくくハートリーフクッションが必要と考えられた。
  - ・椅子を動かすことが多く、座面の縁で座りたがる事例。圧や運動感覚の欲求が高いことが背景的な要因。感覚の欲求を満たすことができるよう座面にクッションを付けると安定して座ることができ、授業をより集中して受けることができた。

- ・鉛筆がうまく持てず書き続けると疲れる事例。手指の巧緻性の未熟さと触覚の分かりにくさのために、三指では細い鉛筆をしっかりと持つことができず、代償的に四指で力を入れて持っていることが背景的な要因。三角の鉛筆グリップを付けることで、鉛筆との接点が増え、鉛筆を捉えやすくなった結果、三指で鉛筆を持つことが可能となり疲れずに書くことが可能となった。
- ・指先で箸を操作できずクロス箸になり、何度もつまみ直しをしている事例。手指の巧緻性の未熟さが背景的な要因。子どもに応じた補助具をつけることで、指先で箸を操作してつまむことができるようになった。

⑤子どもが努力して物や道具の操作を行っている場合、出やすい運動のサインを説明した。このような反応を捉えることで、子どもの努力を認めることができること、過剰な負担をかけることがないような工夫や細かな段階付けにつながっていくことを説明した。

⑥教材教具を展示した。ちょっとした工夫で活動がより行いやすくなることを体験していただいた。

#### 【展示物】

- ・ハートリーフクッション
- ・滑り止めシート
- ・滑り止めを貼った定規、分度器
- ・市販の滑り止め加工された定規、分度器
- ・紙の下に滑り止めシートを敷くことで、コンパスが操作しやすくなる工夫例
- ・市販の操作しやすいコンパス
- ・滑り止め加工した三角鉛筆
- ・太い三角鉛筆、色鉛筆
- ・各種の鉛筆グリップ



展示教具

## ワークショップ 報告

### ●ワークショッププログラム

- 1 ワークショップ進行説明
- 2 ケーススタディ対象児 ビデオ上映
- 3 ビデオ・資料をもとにグループごとに子どもの特徴・抱えている問題点を検討。  
可能性や支援方法を考える。
- 4 各グループ発表
- 5 各講師より総評
- 6 質疑応答

### ●ケーススタディ対象児 小学校2年女子 普通学級在籍

#### ●グループ発表内容

##### <特徴・問題点>

不注意なところがあるせいで、集中できない。

音の刺激に弱く、聴覚過敏かもしれない。

空間認知に弱く、漢字の形がとらえられていない。

姿勢保持が難しく、じっとしてられない。

数の概念が理解できていないのかもしれない。

一生懸命に課題にとりくんではいる。

国語の授業で、教科書の文章を1人一文ずつ読み上げ、続けて皆で読むということをしているが、本人は正確に復唱はしているのに、自分の順番になると、どこを読むのかわからなくなっている。

予定帳に写すさい、ひらがなとカタカナを混同している。

算数のテストは筆算を書くスペースが狭いため、あきらめてしまうのかもしれない。

さくらんぼ計算のやりかたに納得ができないので、わからないのではないかな。

テストの問題の意味・求められていることがわかっていない。

##### <対策>

授業に動きを取り入れてあげるとよいのではないかな。

姿勢を保ちやすくするツールを使ってあげる

授業中、どこを読んでいるのかわからなくなるので、付箋を使う。

漢字の形がよく分かっていないので、部首に分けて、しっかり形を覚えさせて、声にだして読みながら覚えるようにする。

先生が声をかけるタイミングを工夫したほうがよい。(ひとつのことが終わらないうちに声がかかるので、混乱してしまう。)

算数のプリントの問題が多くて、やる気を失っているのかもしれないので、少し問題を減らして書くスペースを広くとればできるのではないかな。

予定帳に書くことが難しければ、国語→こ と書くなどわかっていることは省いて、大事なことだけ(宿題とか連絡事項とか)を書くようにする。

手づくりのプリントは見づらいのかもしれないので、例えば時計の絵を見て時間をこたえる場合大きくするとか、問題を読み上げる。

集中させるため、テストは別室で静かに受けられるように環境を整える

先生の指示を本人に復唱させるとよいのではないかな。



●各講師より総評

<特徴・問題点>

ベース（根本的な原因）なのが、「不注意」であり、それが聴覚過敏・集中力の欠如・多動・衝動につながっている。

注意の集中とコントロールが難しい。

↓

- ・課題を最後までやれない。
- ・文章の読解が弱い
- ・指示を受けてすぐに動けず、出遅れる
- ・常に動きたい衝動にかられる。姿勢が悪いというのは筋力がないというより、常に動きたいため 字が乱れている。（右上がりになったり、左上がりになったりする。）

<支援の方法>

- ・ぼーっとしていたら、「今から大事な話をするよ」「今は何をやるの？」などと声かけしてもらう。
- ・足元に足ツボ刺激の竹を置いたり、イスの座面の裏に芝生を貼っておいて時々触ったりして衝動を抑える練習をする。
- ・論理的な思考トレーニングとして、オセロ等のゲームで先を読むことで、推論をする練習をする。
- ・どうしても、注意のコントロールができない場合は医師に相談して 薬を使うという手もある。

●質疑応答

Q:根本的な原因を見つけるには、どこに相談したらよいか。

A:（静岡の事情はよくわからないけれども、と断ったうえで）例えば、近畿地方では年に4.5回無料のLD相談会があるので、遠くても行ってみるという手もある。

Q:姿勢がしっかりしないが、どうしたら良いか。

A:動いている時は大丈夫だが、じっとしていると姿勢が悪くなる。自分で、こういう姿勢が苦手だなあと自覚できるようになれば、自分でコントロールができる。

以上



ワークショップ

サポートツール全国キャラバン2013「教材教具研修会」in 静岡  
発達障害がある子ども一人ひとりのニーズに応じた指導・支援の具体的方法

## 〈アンケート集計〉

### 1. 参加者の人数・属性

○参加者数 114名 (講演1 113名 講演2 107名 ワークショップ91名)

○参加者内訳 一般参加 68名 正会員 43名 賛助会員 3名 合計 114名

(1) 保護者 56 (きんもくせい正会員 43 その他 13)

(2) 教員 26 (小学校 22 中学校 2 高校 1 その他 1(通級))

(3) 作業療法士 8(医療 5 療育 1 福祉 1(障害者) その他 1(特別支援教育センター))

(4) その他 24 (医師 保健師 言語聴覚士 社会福祉士 相談支援専門員、指導員  
支援員 発達障害者支援コーディネーターなど)

○アンケート回収 68枚/114人

(1)保護者 13

(2)教員 23

(3)作業療法士 8

(4)その他 24

### 2. 感想

#### 講演1

##### 保護者

- ・いつも腕組みをして子どもの宿題をチェックしていた。机のまわりには漫画があり気が散っていた。帰ったらすぐに周りの環境を変えてサポート方法を変えていく。
- ・どんなよい教材でも、本人の困っていることに合わないと本人のやる気を失わせていくことがあるとわかった。
- ・子どもがいうことをきくこと、全くきかないことがあり不思議でしかたなかったが、納得させられるということが腑に落ちた。
- ・学校の先生や通級の先生がたの研修でしてほしいと思った。
- ・山田先生が近くにいてほしいと思った。うちの子をみていただきたい。
- ・「なぜか」と原因を解析することが大切と改めて思った。「全部できなくても・・・」も頭のすみに残して生活したい。

##### 教員

- ・困難さの背景のさぐりかたの例も参考になった。
- ・子どもたちにうまくいかない説明をして、それからうまくいく方法を教えてそれを徹底的に行うことがわかった。その因果関係を科学的にとらえる力をつけたいと思った。
- ・勉強になった。
- ・聴きながら、クラスの子どもたちの顔が何人も浮かんだ。
- ・普段の指導の過ちを教えていただいた。子どもの実態を考えるのですが、その原因にまで行きつかぬまま指導しているのが現状である。原因をさぐるスキルがない。子どもたちに申し訳ない。
- ・さらに自分の研修をすすめたいという意欲づけになった。

- ・新しい方法を知ったときすぐに飛びついてしまう自分にとって、あれこれ試すことは子どものためにならないということが重く残った。
- ・なぜつまづいているのか、的確に課題分析できる力が不足していることを痛感した。
- ・私立底辺校とよばれる高校に勤務。発達障害の生徒は 30 人クラスに 5-6 人はいる状態に戸惑う。今日の話参考に新学期に向かおうと思う。

#### 作業療法士

- ・具体的な支援内容が参考になった。わかりやすかった。面白かった。
- ・支援のためには1人ひとりの状態を把握し、その子にあった支援をしていくこと。
- ・ユーモアと柔軟性が大切と感じた。
- ・お子さん自身が自分の特性や支援のしかたを納得することの重要性を再認識した。
- ・アセスメントを担う人材として貢献できるよう努力していきたい。

#### その他

- ・実践されているかたの経験に裏付けられていて、興味深い内容だった。(SC)
- ・山田先生が子どものアセスメントを適切にされる高い能力を持ち、そのうえで多数の手立て・教材を選んでいらっしゃる事が印象的。通常学級にいる子どもに対してどれだけ個々の視点をもてるか、現実には厳しいように思う。(言語聴覚士)
- ・小学4年9歳の壁というお話に納得した。小4から学校に行っていなくて現在どこにも所属していないかたの支援をしている。(社会福祉士)
- ・先生の話術が素晴らしい。(支援員)
- ・日常に置き換えすぐに実行できる話でよかった。(特別支援教育支援員)
- ・アセスメントの重要性をふりかえることができた。子どもの支援だけでなく、教師や相談員のアセスメント力をあげる研修や事例をもっとやっていかなくてはと感じた。(相談支援事業所コーディネーター)

## 講演 2

### 保護者

- ・試してみたい工夫がたくさんあった。具体的でわかりやすかった。
- ・子どもが困っているところを、道具を使って支援することが子どもの意欲を高める。
- ・シートの活用がとても参考になった。
- ・「感覚統合」についての講演が少ない。もっといろいろなところで講演の場がほしい。
- ・子どもの行動にはその子なりの意味・理由あることがわかると支援がみえてくる。親が試されているが、今からでもそれに気づくことで可能性がうまれてくるのがわかり、うれしく思った。
- ・いろいろな教材・教具を教えてください、ありがとうございました。

### 教員

- ・子どもが集中して学習に取り組めるよう、欲求を解決してあげたい。
- ・具体的な goods が参考になったが、値段や売り場も提示していただけるとわかりやすい。
- ・小さい時から家庭で見守って育てていたら、その子は無事に大人になれるのだろうと感じた。現代は片親や低所得の家庭が激増して何の支援もなく大人になっていく子が多いのが現実で、これからの社会に不安を感じる。
- ・「生理的欲求を満たす方策を考えてその子の行動をコントロールできるようにする」というのは目からうろこである。
- ・「その子が欲しい感覚を生活のなかにいれる。」私たちのほうが感覚を研ぎ澄ます必要を感じた。
- ・一緒に勉強していて、姿勢の気になる子がたくさんいる。
- ・子どもの行動についてのアセスメントの取り方や考えかたを丁寧に教えていただき、山田先生の講演とリンクしていて、ありがたい。

- ・感覚刺激を求める子どもに代替の者を与えるということはとても役にたったのだが、その代替刺激はずっと与え続けないとだめなのかどうか。
- ・無意識の部分を意識化することで子どものつまずきにあった支援が考えられるということを再認識した。
- ・感覚刺激は（も）脳の栄養というスタンスで子どもを応援したい。
- ・初歩的な内容で少し物足りなかった。また、お聴きしたい。

#### 作業療法士

- ・苦手を見つけるための考えかたとしてわかりやすかった。背景の話が OT にとって勉強になった。自分の支援方法が間違いなかったと感じ安心したと同時に試したいことがたくさんあった。
- ・支援者には観察力が必要。
- ・作業療法の内容（言葉）をわかりやすく伝えることの難しさを感じた。一般のかたはどのように受け止められたか知りたいと思った。「できるところにヒントがある。」に納得する。

#### その他

- ・爪先立ちしている子ども、匂いを嗅ぐ、常同行動等の発達を持っている場合の感覚について、なぜそうするのか、治そうとしないで生活・成長を助ける方法についてもっと知りたい。一般的に入口の説明だったように思えた。(SC)
- ・小学校の現場でも **sensory needs** を充たす環境設定をされている例を紹介いただき、「きちんと理由がわかっていただければ、取り入れていただけるんだ」と思った。方法論だけでなく、「何故その方法をとるのか」本人の背景を丁寧に伝える努力をしたい。(言語聴覚士)
- ・自分たちの発想とは違う側面からの話がきけて、とても新鮮。支援はいろいろな職種でチームでやることの大切さを実感した。(保健師)
- ・すぐ使えそうなものがあり、やってみたくなった。行動には意味があり、理由があると自分もそう考えて支援を組み立てていたので、おおいに共感した。(社会福祉士)
- ・つついっこれだけ行くと、ここまでやらせたいと考えていたが、それは支援者の欲であって、子どもはたいへんなことだと気づきかえした。(指導員)
- ・姿勢保持の背景について理解できた。安定するために子どもが何に困っているのか大人が実際にやってみて感じてあげることが大事。(指導員)

#### ワークショップ

##### 保護者

- ・保護者が多く参加しているので、ワークショップは必要か。もっと講演を長くしたほうがよい。専門的な用語が多く、議論の内容もある程度の知識が必要とされる。
- ・短い時間、少しの情報からその子のなにが問題か、どうしたら良いかを見つけ出すことの難しさを感じた。
- ・子どもを理解する視点を教えていただいた。全然思いつかなかった視点があり、とても参考になった。
- ・こういう先生がたがたくさんいてほしいと思った。
- ・講演でアセスメントの重要性を再確認したのに、最後に両先生のお話によって、自分たちのアセスメントの不十分さを痛感した。
- ・難しかったが、たくさん考えたことがきっと役にたつと思う。

##### 教員

- ・現れについてはいくつか気づくことができたが、その原因についてはなかなか難しい。
- ・その子の困難さのベースになっているものは何なのか、その視点を忘れずに子どもたちに向き合っていきたいと思った。
- ・自分の考えの未熟さがよくわかって、大変ありがたかった。

- ・山田先生の最後の話が本当に勉強になった。
- ・指導者として、部分と全体と根本をバランスよくみる力が必要と痛感した。
- ・事例から、いろいろな事象に惑わされずに、根本（ベース）を見つけるのは難しいが努力しなければいけないと思う。

#### 作業療法士

- ・多くの立場（さまざまな職種、さまざまな環境）のかたと交流できて、お子さんを取り巻く現状を知ることができた。普段見ているお子さん以外の話や支援されている先生がたの話が刺激的だった。
- ・いろいろな意見がでて、勉強になった。
- ・皆さんが鋭い視点を持たれていることに驚き、刺激をうけた。

#### その他

- ・アセスメントをひとりで行うことも多く、悩むこともある。ビデオに撮ってみんなで見るだけで、たくさん見立てがでることに気づいた。（相談支援事業所コーディネーター）
- ・「ベースを知る」ことの大切さを実感した。（療育関係）
- ・講演を聴くだけでなく、このワークをさせてもらってよかった。（社会福祉士）
- ・ケースの抱えている問題のとらえ方、とらえたものをどう支援に生かしていくのか、というところで学び直しさせていただいた。（保育士）
- ・意外と、保護者のかたのお話がリアリティがあって頼もしかった。（指導員）
- ・話し合いは5～6人のほうが話しやすく、聞きやすいかと感じた。（支援員）
- ・自分で支援の枠を構築しなければいけなかったため、自分のもてるものを総動員して考える必要があった。良い経験。今後につなげたい。（SC）

#### 4、「特別支援教育」「発達障害者支援法」に望まれることやその他ご意見ご感想

- ・文科省のインクルージョン教育の推進や合理的配慮と静岡県の小6国語最下位に対する対応（テストの練習をしている）とのギャップを感じる。（支援員）
- ・今回のようなスタイルの研修会は県外にいないとない。よりよい支援に生かすための勉強になるので、もっとあるとうれしい。（特別支援教育指導員）
- ・きんもくせいの保護者の方々がとても熱心にメモをとって受講されている姿がとても印象的。おかあさんたちががんばっているなあとパワーをもらった。（保育士）
- ・診断や手帳がなくても、お困りであれば支援が受けられるような制度に変わるように望む。（社会福祉士）
- ・学校だけでなく、幼稚園からの支援を叫ばれているが、それに対応できる人員配置や施設がまったく足りない。（児童発達支援）
- ・特別支援教育：通常学級でも子どもそれぞれのやりかたで支援できるようにユニバーサル化がすすんでほしい。「みんな一緒」ではなく、「みんな違ってみんないい」が広がってほしい。そのためには私たちが成功を繰り返していくことが必要だ。（相談支援事業所コーディネーター）
- ・ワークショップに参加して、家・学校・医療・サポート機関の繋がりがもともとてるとお子さんへの支援がスムーズになるのではないかと感じた。（作業療法士）
- ・先生個人の能力ではなく、どの学校でも理解ある支援を。（作業療法士）
- ・支援学校・支援学級だけの対象ではなく、普通学級のなかでの学習障害児の対応を。教師もわからないことが多すぎる。（高校教員）
- ・いかに息子の学校が支援してくれていないかがわかり、学校に求めていこうと思った。（保護者）
- ・中学校以上にも支援を（保護者）





講演 1

講演 2



展示コーナー

